

父のこと

三中38回 高林藤樹

父は自分に厳しい人だった。そして我が子の躾も厳しかった。言葉遣いや行儀作法などとても厳しかった。つらい思い出もたくさんある。しかし、それは我が子が可愛かつたからに他ならないと思う。私は久しく父を尊敬して來たが、我が子の教育については同じ轍を踏むまいと思つてゐる。私の子供はもうすでに平均年齢四十一才で、今更躾でもないが、子供（孫）の教育については多少の参考意見を持ち合わせてゐる。尤も、教育と言つても父の時代と私の時代では、大違ひである。背景の違いを差し措いて、徹を踏まぬなどと言えた義理ではないと思うが。さて、父の薰陶を受けた私は、小学校二年生の時、将来の夢など聞かれ、級友達がてんでに看護婦さんや先生やおもちゃ屋さんや運転手などを争つて答える中で、一人「天皇陛下の御用が出来る人」と答えた。担任の先生は吃驚していたが、級友達はただボケンとしていた。私はそのボケンが許せなかつた。

昭和十六年に太平洋戦争が始まると、父は家族一同を連れてご先祖の墓へ行き、「この戦争はきっと負ける。みんなは今から決死の覚悟をせよ。」と言った。父の洗脳のお蔭か、私達子供は何も恐れることなく、その言葉に従つた。

二年経つて私は中学二年生になつた。学校（京三中）は進学校として伝統のある学校だったが、その頃の進学率というのは軍関係の学校を指していた。一年生二年生は陸軍幼年学校へ行く。一年生三年生からは少年志願兵として色々な学校を目指した。四年生五年生となると、一般の高等学校（京都では良く出来る者は三高へ行く）だけでなく、海軍兵学校や陸軍士官学校を志願した。先輩が休暇などをを利用して後輩を勧誘に来ると、その凛々しい態度やスマートな服装にみんな憧れた。その憧れに釣られて、私も志願したいと考えた。

その時、父は「兵学校や士官学校は将校を養成するところである。碌を食んで、殺しを生業とするような生き方はいけない。」と言つた。それで私は陛下のため、国のために、命を擲つて醜の御楯となるために兵という身分を選び、当時最も必要とされていた海軍飛行兵を志した。募集要項を見ると、実戦に一番早く役立つのは甲種予科練であった。かくして昭和十九年六月（中学三年生一学期）、私は土浦海軍航空隊に入隊した。

両親は「万歳、万歳」で送り出してくれたが、自室の壁には「入

隊の日まで後〇〇日」と書かれていて、そのカウントダウンは悲痛な響きを持っていた。

終戦になり、私は敗残兵となつた。厚木基地に不穏な空気があり、海軍の蹶起が伝えられたりして、私の復員は八月二十七日になつた。同じ京都から来ていた戦友が家族と連絡が取れたとか、それでいないとか、いろいろな情報を知つたかぶりして触れ回つていた。私は動転していて、家へ連絡しなかつた。家に電話がなかつたせいもあり、連絡の方法などなかつたのではないか。

いよいよ復員の日が來た。常磐線の上りに乗る者数名と一緒に土浦駅のプラットフォームにいると、突然敵の艦載機（ロッキードだったかグラマンだつたか）が低空でやつてきて我々を威嚇した。

それから東京へ出たが、乗る列車の当てもなくて困り果てていたら、駅のアナウンスが品川から貨物列車が出るので、復員兵は乗れと言つている。重い海軍の衣嚢を担いで品川まで線路を歩いた。

待つっていたのは長い長い貨物列車だつた。あてがわれた無蓋貨車には陸軍の兵隊が大勢乗つていた。片隅を譲つて貰い、坐つた。廻りの兵隊は皆おじさんだつた。彼らはみんな缶詰を持っていて、一人が珍しい餅の缶詰を開けて振る舞つてくれた。

そして家に帰ることを心から喜んでいた。また別一人は「こんな可愛い少年をしかも長男を戦に送り出すなんて、何という親だ」と言つた。丹那トンネルあたりから雨になつた。貨物用の防水シートがあつたので、みんなで引っ張つて被つて寝た。そして何時間かして雨は止み、月が出た。そこはもう琵琶湖だつた。

午前四時、いよいよ京都に着いた。駅は灯火管制のための黒い幕がまだ張り巡らされていて、真っ暗だつた。改札口を出ようとした時、一つの影が近寄り、私を呼んだ。父だ。私はびっくりした。恐ろしかつた。帰る日を知らせず。こつそり帰ってきたのに、どこで情報を得たのか、今日あたりと見当をつけ迎えに来ていたのだ。まだ初発の市電もない時間なのに。父は抱かんばかりに私の復員を喜び、持参の弁当を食えとすすめた。聞けば母や弟妹も時間を交替して迎えに来ていたといふ。

私は何を考えていたのだろう。敗残兵となつて、皇恩にも報いず、敵を一人だもやつつけず、おめおめと帰つてきたのだ。厳しい父にどんなに叱られることかと恐れていた。

「親心、子を持つてみて、泣いてみて」今、私は七十六才になり、孫があの時の年齢になつてゐる。戦争とは何か。尽忠とは何か。親とは何か。命とは何か。その他あれこれと考えていふ毎日ではあるが、胸の内はひたすら「反戦・平和」です。